

# 下肢の外傷疾患

北アルプス医療センターあづみ病院  
整形外科医長

狩野 修治

第3回では大腿骨頸部／転子部骨折について紹介させていただきます

## ■大腿骨頸部骨折と転子部骨折

大腿骨近位部の骨折は一般的に図のような骨頭・頸部・頸基部・転子部、転子下におこることが多いとされます。大腿骨骨頭骨折・転子下骨折は交通事故や労働災害といった高エネルギー外傷で起こりやすいとされ、大腿骨頸部骨折・転子部骨折は骨粗鬆症といった骨の脆弱性のある高齢者の転倒といった低エネルギーの外傷により起こることが多いとされています。

## ■症 状

転倒により受傷されることが多い、股関節痛のため動けなくなるといた状態が典型的です。しかし、高齢の認知症があつたり、また骨折部に転位がなく安定していると歩行できることも稀にあります。歩けるので大丈夫とはいきません。転倒され股関節痛が出現している場合は一度受診されることをおすすめします。

## ■診 断

単純X線写真で診断できる場合がほとんどです。しかし転移のない骨折は単純X線写真ではわからないことがあります。CTやMRIなどの検査によつて骨折を診断ができることがあります。

## ■治療方法

手術療法がすすめられます。手術の方法は骨接合術と人工骨頭挿入術があります。



転子部骨折



頸部骨折

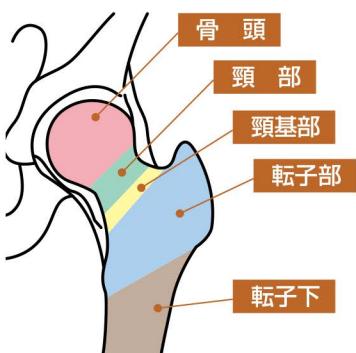
ずれている大腿骨頸部骨折はずれていません。大腿骨頸部骨折にくらべ、骨が癒合する確率が低いとされ、癒合しても、経過中に約半数の症例の大転子骨頭がつぶれてしまう骨頭壊死が起こる報告されておりまます。このことからずれていない大腿骨頸部骨折には骨接合術が、ずれてしまつた大腿骨頸部骨折には人工骨頭挿入術をおすすめします。

## ■予 後

受傷後、適切な手術を行い、適切なリハビリテーションを行つてもすべての方が受傷前の状態までもどることはむずかしいとされています。受傷前の歩行能力、年齢、認知症の有無が歩行機能に影響しているとされています。

## ■予 防

大腿骨頸部・転子部骨折の予防としては、運動療法と薬物療法がすすめられます。骨粗鬆症の治療により大腿骨頸部・転子部骨折の予防効果の報告があります。また運動療法による骨折の予防効果は不明ですが、運動療法は転倒予防に有効とされています。



大腿骨頸部・転子部骨折は、2007年には約15万人が受傷したとされ、年々増加していると報告されています。40歳から年齢とともに増加し、70歳以上に急増します。また大腿骨転子部骨折は大腿骨頸部骨折の1.3～1.7倍と報告され、高齢になるにつれて大腿骨転子部骨折の発生が多くなるとされます。

## ■疫 学

大腿骨頸部・転子部骨折は、2007年には約15万人が受傷したとされ、年々増加していると報告されています。40歳から年齢とともに増加し、70歳以上に急増します。また大腿骨転子部骨折は大腿骨頸部骨折の1.3～1.7倍と報告され、高齢になるにつれて大腿骨転子部骨折の発生が多くなるとされます。

## ■大 股 骨 頸 部 骨 折

大腿骨頸部骨折は、年々増加していると報告されています。40歳から年齢とともに増加し、70歳以上に急増します。また大腿骨転子部骨折は大腿骨頸部骨折の1.3～1.7倍と報告され、高齢になるにつれて大腿骨転子部骨折の発生が多くなるとされます。

大腿骨転子部骨折はずれています。大腿骨転子部骨折は、年々増加していると報告されています。40歳から年齢とともに増加し、70歳以上に急増します。また大腿骨転子部骨折は大腿骨頸部骨折の1.3～1.7倍と報告され、高齢になるにつれて大腿骨転子部骨折の発生が多くなるとされます。

## ■予 防

大腿骨頸部・転子部骨折の予防としては、運動療法と薬物療法がすすめられます。骨粗鬆症の治療により大腿骨頸部・転子部骨折の予防効果の報告があります。また運動療法による骨折の予防効果は不明ですが、運動療法は転倒予防に有効とされています。